



江戸っ子あるー

お笑あつた

横川 三三 氏

ふれしよろ





ソレまづ春といふは、人の  
 氣がはるといふ心から春  
 大晦日迄は汚なりでも目  
 にもかゝらぬものなり。  
 早一夜明けると青梅縞の  
 光がそこら中から出る故  
 に同じ様な仕立下を着て  
 歩かねばならず、そこで氣  
 がはるといふやうか。



とまろちるといふ人のまろちるといふとろ  
 くとろ太三十四とをいふとれあうても同  
 ともくわぬめのあるともや一夜らけるとま  
 ぬしまのひんぐらそらう  
 ちくくさるぬふえあ  
 よくぬまてかえとどさ  
 てつらういあすそとて  
 きんたるといふ  
 ちう  
 ぬちまろま  
 正月のたて  
 親王工付  
 三八よる  
 十町工付  
 亀藏曰  
 中島曰  
 魚樂曰

又ばくせつに正月の  
譚名を、  
親玉エ付。三八エは  
る。十町エ同。龜藏  
エ同。中富エ同。魚  
樂エ同。

「京棧にしようと思つた  
が、思ひきつて唐棧

どうた。」

「羽織のとう ありがあ  
りが。」



二月、此月をきさらぎといふ心は人のきさらぎといふからきさらぎに博奕うつとも、女郎買ふとも、更に身をうち、親爺に勘當されようとは更に思はねども、かの正月は遊ぶものも心得て、はめをはづして遊んだところが、つまらず、はや三月のもの前が鼻の前にしやつき張つて居る故、成程つまらなく鏡を遣つたと狐にばかされたかと思ふ心から、重ねて誑されぬやうにと、稻荷様を祭り、このしろや豆腐のお鼻薬を支うたものなり。



初午とは狐を午に乗せた  
からの思ひつきと、年中古  
事附録にみえたり。

「高麗屋に描かせるとはい  
い趣向だ、高麗屋の御趣  
向く。」

「なんだ、親玉がよく似た、  
紀の國屋もいゝの。」

「よく描いたぞ、とんと出  
たやうだ。」

「こつちとは濱村屋のおや  
ちがい。」

「えゝ加減に仰向け、エ、  
薦が糞をするぞ。」







もに見せしに、アレアレい  
 いなといひそめしを、今は  
 洒落れてひいなといふ。  
 「アレ見や、いゝなく、  
 ひいな〜と見てえる。」  
 又白酒は源平を表したり  
 白し、酔へば顔赤し。  
 もう飲まれませぬといふ  
 に愈々強ひて弱はせる故  
 に、くどく彌生々と申  
 すなり。  
 「これ御覽、顔が眞赤にな  
 りました。」



黒長命子狐物語

四月

此月を卯月といふは、此月  
 多く時鳥が鳴く。その聲を  
 早く聞かんと、人皆有頂天  
 になつて居る。そのうの字  
 と月と書いてう月といふ。  
 「たつた今月が鳴いたかほ  
 とゝぎす」との句で考へて  
 見るべし。

耳が長くばあの一聲も近  
 く聞ゆるだらうと思ひし  
 より、耳の長いものは鬼だ  
 から、今は此卯の字を書  
 く。

段々生暑くなつて、風がた  
 かる故、衣がいと衣更と  
 いふ。



四月  
 此月と身月といふは、卯月なりて、  
 とき鳥の鳴く声、人皆有頂天とな  
 りて居る。そのうの字と月と書いて  
 う月といふ。たつた今月が鳴いたか  
 ほとゝぎすとの句で考へて見るべし。

五月

此月を早苗月といふ事、どうも解らぬから、兩國へ行つて平澤に占はしたところ、はてさなへだから、さなへ月といふと、平澤がいふ故、それで解つてより平澤左内月といふ人もあり。

又柏餅の事は、かみ様が忙しい中で乳を飲ませながら拵へたを抱柏。今出来るから食つて行けと止めたをつる柏。さうしてたつた三つ食はせて三つ柏とはどうだ。

此月に閑がある、もう一月まるめて團子にせう。



馬鹿長命子氣物語

六月

此月の晦日に六月祓として禰宜の借鏡拂をするなり。すべて水邊に出でてする事なり。これは古い借をば水にしてしまふといふ心。その中に味噌屋へ拂つたをみそぎのはらひといふなり。掛股をば邪鬼といふ。不斷責められてあつ果果てたといふ。

此はらひにて禰宜は晦日忙しき。

歌に

湯豆腐のさらば支度をゆふだすき禰宜はみそぎにあひまはしけり。

川端へ出したのは神文谷の馬か、なにさ、書出しさ。

六月

六月の晦日、六月祓として、禰宜の借を水に流す事なり。昔の借を水に流す事なり。味噌屋へ借したものをみそぎといふ。掛股をば邪鬼といふ。不斷責められてあつ果果てたといふ。



六月の晦日、六月祓として、禰宜の借を水に流す事なり。昔の借を水に流す事なり。味噌屋へ借したものをみそぎといふ。掛股をば邪鬼といふ。不斷責められてあつ果果てたといふ。

川をこぎ  
このひびき  
ヤのてら  
まふら  
るる

七月

此月七日に牽牛織女のはじめの契に、餘り嬉しがり過ぎていろいろ痴語り給ひて、痴話を雲間より下界へおとせしより、文月といふ。又その文を下界の人々ふんだが踏月ともいふとあり。その文をそこへ届けんとすれども、よたよりい便がない故、竹の先へつけて空へ届けしを、今は五色の紙に書いて出す。

「菱本四文にさつせい。」

「お爺が爺ちやアあるめえし。」

「それでいやならよしなんし。内へ持つて歸つて、煤播竹までしまつて置きませう。それで残りはもうさう竹だ。」



馬鹿長命子氣物誌

八月

此月八朔吉原の雪といふ  
事謂知らず、吉原通に聞く  
べし。

十五夜を望月といふは、下  
戸がはじめたからもち月、  
このもちが取つて食はれ  
ぬもの故、仕方なく園子を  
拵へて食うたもの。

秋風になると寂しいもの  
故、人の心が寒いで來ると  
ころを見世さえるなり。

歌にも  
ふさぎく何見世騒ぐ、  
十五夜お月様見てさえ  
る。



八月は月かま  
りて秋のやれと  
りふりいふれま  
らばよき月  
つらよき月

十八夜をもち  
つとくといふは  
下戸をもち  
つとくといふは  
ものもち  
つとくといふは  
ものもち

れぬもの故、  
仕方なく園子  
を拵へて食う  
たもの。

秋風になると  
寂しいもの  
故、人の心が  
寒いで來ると  
ころを見世さ  
えるなり。

歌にも  
ふさぎく何見  
世騒ぐ、十五  
夜お月様見て  
さえる。

ぬも、さる、  
く、ふ、い、  
も、こ、つ、  
の、よ、

の、よ、え、ち、  
の、よ、

「思ひ鳥よりわしが角  
鷹さ。」

「ぬか縄さん、ぐにや  
富と高麗屋息子をつ  
かひねえよウ。」

「有難山の吉ほうなん  
だらうの。」

「宵に降つたる雨上り  
花水橋の樋の口から  
「葱に鮭はなア、一入  
よからう。」



九月

此月を菊月といふは菊の花の事にあらず。そして何たと聞く月なり。聞くは當座の恥、聞かぬは未代の恥。長月ともし聞かぬと長月恥をかくといふ心なり。くだい人が何通も聞くをきくかさねといふ。重陽とは蝶が菊の露に酔つたからの思ひつきて蝶酔。人も此日菊酒を飲めば長命なり。長命の長と蝶のてふと二つ合はせててふくちやと昔妻與五郎といふ書に見えたり。

「此花もおいらが側に居ると、共に寝々菊だ。」  
 「月を見て飲んだからおと月なんぞはどうだの。」  
 「わたしは酌をしながら、おとつきがよからう。」

九月は月をきく月と云ふ





十月

此月を神無月といふ事、風激しく木の葉もおちて、あの木も坊主になつたといふ故、葉無月なり。何故又木の葉をかみといふならば、ひねつた人が柳髪などといふ故に、皆それにししてしまつたもの。

又亥の子として牡丹餅を搦へる事は猪に牡丹餅の心、獅子に牡丹、これよりいひ傳ふる。徒然なるまゝに日暮に落し對ひ、そこらに散りし木の葉を、こゝ漙ぶとなく掻き散らせば風吹くこそもの狂はしき。

「だしなし木の葉がおちたの兼好だ。」



馬鹿長命氣物語

十一月

此月を霜降月といふ。むだに芋賣月ともいふ。祝ひ髪置帯解、これは何の事もなくあとこの月にかみなし月だによつて、此月から髪をたてはじめるなり。帯解といふは子供の祝ばかりにもよらず、岡場所の女郎買を聞くに、霜柱には女郎客を大事にする事この月からなり。



「あの熊さんも情なしだ、この頃は、ふつふりはつたり足が止つた。」

「昨夜の夢見が悪かつたが、凶が吉へかへつて、今夜アとんだ事の。」

「勤はじまつてお前の様な嬉しい客はねえぞ。」

「お前ほんに脇へ行きなんなよ、もしそんな話があるとな聞かねえよ。」

「あの熊さんも情なしだ、この頃は、ふつふりはつたり足が止つた。」

ゆべのゆめ

さくさくさく

まぐんつて

こんやア

こんご

こともの

まつて

かめ工のよめる

くわいさいやん

ぬ工を



十二月

此月を臘月ろうがつといふは、人も年積れば老人といふ故、此としもはやらう月といふのなり。

歳暮さいぼ  
歳末さいまつ

此さいまつといふ事は、此月のいそがし序ついでに約束した女房などを、どさくさに引ずり込む事なれば、男も妻をまつ、女も女房にならんと待つ故、さいまつ。

暮は遺物じぶつなんぞ持て來ても、せわしい故に、置くと直ちかに歸る足のひき様が早はやいからしほ引。

十二月

十二月どろろ月どろろづきといふは、人も年積れば老人といふ故、此としもはやらう月といふのなり。

歳暮さいぼ  
歳末さいまつ

さいまつといふ事は、此月のいそがし序ついでに約束した女房などを、どさくさに引ずり込む事なれば、男も妻をまつ、女も女房にならんと待つ故、さいまつ。

さいまつといふ事は、此月のいそがし序ついでに約束した女房などを、どさくさに引ずり込む事なれば、男も妻をまつ、女も女房にならんと待つ故、さいまつ。



又つき出して歸るからぼ  
う鱈。匆々立つから田作。  
人も尻焼けたといふ心で、  
焼いておつつけるの牛蒡。  
まづこんなもの。

「さあ〜、丸綿をとつて餅花でもいけて下さ  
え。」

「仲人は宵の程だからひ  
らいて書出でも書きて



馬鹿命子氣物語

段々話して来たところ  
 て、また此春にめぐり  
 来るを、一服すつてま  
 た蒸し直しを話して聞  
 かさうといへば、伊五  
 も習ふよりなれて伸び  
 たる鼻の下、長き齡を  
 後生樂、幾つになつて  
 も正月はい、ぢやアね  
 えぢやアねえか。

